平成 28 年度

大阪新美術館建設準備室連携事業報告書

大阪新美術館（仮称）は、北区中之島４丁目の建設予定地に、2021年度の開館をめざして整備計画を進めています。また、今年度は公募型設計競技を行い、公開プレゼンテーションをへて、この平成29（2017）年２月には建物の最優秀設計案を決定しました。美術館の整備計画がオープンに向けていよいよ大きく動き出します。

新しい美術館は、作品・資料の収集・保存、研究、展示といった美術館の基本的機能を大切にしつつ、そこにとどまることなく、美術館からの一方的な情報提供になりがちな従来の教育普及活動からも歩を進め、美術館の外と積極的に「連携」しあうことをめざします。

美術館の外に自らを開き、さまざまな立場の人びとと経験や成果を分かち合いたい。外の価値観に触れることで、コレクションや学芸員といった美術館の資源に新たな意義や活用の道を見出したい。そして、アートやデザインを介した出会いと協働の場、いわば「プラットフォーム」となって、美に親しむ喜びをより多くの人に届けたい。新しい美術館の開館を前に、私たちはそのように願っています。

この５年間に、こども、学校、市民、図書館、地域などとともに、さまざまな連携事業を進めてきました。手探りで事業を立ち上げ、検証と改善を繰り返して成熟させてきた４年間をへて、今年度は事業の質の深化や間口の拡大に努めました。従来の活動に加え、２つの展覧会を通してこれまでの連携の経験を自らのコレクション展示に活かし、開館後の活動に対するイメージを膨らませることができたのも、今年度の大きな成果です。この５年間で得られたことを糧に、今後は事業プランの策定など、美術館開館を見据えた活動に取り組んでまいります。

最後になりますが、参加者のみなさまや、事業の関係先のみなさまに、心よりお礼を申し上げます。新しい美術館の整備に向けた今後の私たちの活動に、一層のご理解とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成29（2017）年３月
大阪新美術館建設準備室

平成28年度（2016年度）連携事業　2016

対話型鑑賞ワークショップ　キッズ！ファンタスティック☆ミュージアム p.2

平成28年10月30日（日）〈こどもの部〉、11月５日（土）〈おとなの部〉

みる×つくる ― 創作活動による鑑賞授業 pp.3－4

平成29年１月18日（水）、19日（木）、24日（火）、26日（木）、２月１日（水）、２日（木）

ワークショップ　１枚の段ボールからはじまる“居場所”づくり pp.5－6

平成29年１月29日（日）

トークイベント　〈記録写真〉をよむ―『具体美術協会』関係資料より p.7

平成28年10月７日（金）

新美術館×図書館 わくわくコラボ p.8

▶レクチャー　“春日出のおばけ煙突”と“だまし絵”
平成28年12月４日（日）

▶技術（アート）と美術（アート）　マルキ號製パンと大阪の美術
平成28年12月17日（土）

クロストーク　大阪の版画を語る―『版画８』から現代まで p.9

平成29年１月22日（日）

IDAP国際シンポジウム　くらしを伝えるかたち p.10

平成29年３月24日（金）

外部研修生（インターン）の受入れ pp.11－12

▶吉原治良 作品調査
平成28年６－７月

▶生田花朝 資料調査
平成28年８月

連携事業　５年の歩み p.13

※報告書内一部敬称略

対話型鑑賞ワークショップ　キッズ！ファンタスティック☆ミュージアム

美術作品の新たな活用の可能性を探るため、こどもの専門機関であるキッズプラザ大阪と連携して企画する本ワークショップは、今回で３回目の実施。対話型鑑賞と創作活動を組み合わせる基本的枠組みを維持し、グループで対話しながら本物の絵画作品（吉原治良作品）を観察して想像力を高めたのち、鑑賞で感じた心の動きを、実際に手を動かして創作することで表現した。今回は対象をおとなにも広げ、同じプログラムを小学生／高校生以上の対象年齢別に２回行い、プログラムの有効性を検証した。

日　時：平成28年10月30日（日）13:30－16:00〈こどもの部〉
11月５日（土）13:30－16:00〈おとなの部〉
講　師：岡田可斗子
（キッズプラザ大阪　ミュージアムエデュケーター）
対象・参加者：小学生　16名〈こどもの部〉
高校生以上　13名〈おとなの部〉
会場・共同主催：芦屋市立美術博物館
助　成：一般財団法人　地域創造
「未知の表現を求めて―吉原治良の挑戦」展関連イベントとして実施
［会期　平成28年９月17日－11月27日／会場　芦屋市立美術博物館
主催　大阪新美術館建設準備室、芦屋市立美術博物館］

★ワークショップの内容

対話型鑑賞：「未知の表現を求めて―吉原治良の挑戦」展会場で、吉原治良作品をグループで鑑賞。一つの作品をじっくりと見ながら、ナビゲーターの導きで「見えるもの」「感じたこと」「描かれている世界」などについて発言した。

創作活動：吉原治良の代表的モチーフ“円”にちなみ、さまざまな円の創作に挑戦。約10センチ角の厚紙に、絵具や色鉛筆、毛糸、砂、ビーズなどいろいろな材料を使って、参加者オリジナルの円を表現した。

ワークショップを終えて

外部機関と連携し美術館・美術作品を活用するワークショップとして、平成24－25年度の「みんなで美術館をつくってみよう」（NPO法人cobonとの連携）、平成26－28年度の「キッズ！ファンタスティック☆ミュージアム」（キッズプラザ大阪との連携）の２つのプログラムを実施してきた。いずれも、こどもの専門機関と共にプログラムを作り上げることで、こどもの興味・関心・行動により配慮した内容のワークショップへと発展した。

「キッズ！ファンタスティック☆ミュージアム」の担い手の中心は、各グループを担当するナビゲーターであり、学芸員ではなくこどもの専門家がナビゲーションすることを本ワークショップの大きなねらいとした。参加者の年齢、性格、グループ編成により対話の様子は大きく変わる。それに瞬時に対応しながら、作品の世界観を広げる質問を投げかけ、発語を促していく。このワークショップにおける要の存在はこどもの専門家であり、美術作品の魅力を伝える主体が、学芸員以外にも大きく広がる可能性を実感した。参加者にとっても、作家や作品の知識を一方的に受けるのではなく、絵画から受ける感動や創作の楽しさが記憶に残ることで、美術館を身近に感じることができる内容であった。

本プログラムは３カ年の成果を得ていったん終了となるが、こどもが美術館や美術作品と出会う機会の一つとして、新美術館の開館後の再開を計画している。（主任学芸員　高柳有紀子）

みる×つくる ―― 創作活動による鑑賞授業

大阪府立江之子島文化芸術創造センターと共同で開催した「大阪版画百景」展に合わせ、小学校の授業団体を対象とした鑑賞ワークショップを企画した。ワークシートを用いた通常の鑑賞に加え、出品作家の指導による創作活動と対話型鑑賞を行うことにより、児童の興味を高め、より豊かな鑑賞体験ができる内容とした。
大阪市内の小学校から希望校を募り、市立小学校３校が参加。うち１校は鑑賞体験を発展させた学習を研究授業として実施した。他に鑑賞プログラムのみ実施した小学校も１校あった。

講　師：立嶋滋樹（美術家、「大阪版画百景」展出品作家）
日時・参加者：
平成29年１月18日（水）10:00－12:00／堀江小学校　４年生　２クラス　75名
１月19日（木）10:00－12:00／堀江小学校　４年生　２クラス　76名
１月24日（火）13:30－15:00／大開小学校　５年生　２クラス　55名　※鑑賞プログラムのみ
１月26日（木）13:00－14:50／大道南小学校　４年生　２クラス　74名　※後日研究授業
２月１日（水）10:00－12:00／本田小学校　４年生　２クラス　64名
２月２日（木）10:00－12:00／本田小学校　４年生　１クラス　34名
会場・協力：大阪府立江之子島文化芸術創造センター
助　成：一般財団法人　地域創造
「大阪版画百景　―大阪新美術館×大阪府20世紀美術コレクション―」展関連イベントとして実施
［会期　平成29年１月18日－２月11日／会場　大阪府立江之子島文化芸術創造センター／主催　大阪府立江之子島文化芸術創造センター、大阪新美術館建設準備室］

★ワークショップがめざすもの

制作体験を鑑賞と組み合わせることで、児童が作品からさまざまな“気づき”を得ることを目的とした。また、小学校では接する機会の少ない多版多色技法を簡易に体験することで、版画に対するイメージを拡張することも目的とした。また、小学校教員に美術館等における鑑賞授業を体験してもらい、その教育効果を実感してもらうこともめざした。

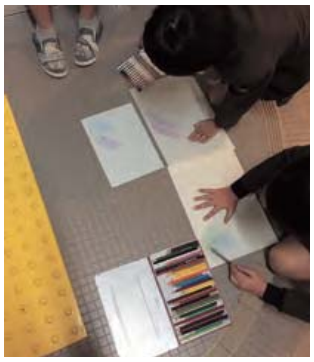
★ワークショップの内容

【創作活動】

・導入・フロッタージュ体験
講師より「今日は〈絵をかく〉のではなく〈絵をつくる〉」ことが伝えられ、その方法としてフロッタージュ（こすり出し技法）を実演。講師が紙の上を色鉛筆でこすると下に隠されていた鍵のかたちが浮かび上がり、児童たちからは驚きの声が漏れた。
児童たちは講師からフロッタージュに適した色鉛筆・クレヨンの持ち方と、色が薄いときは、上から濃い色を重ねるとよいことを教わり、イスの背もたれの穴を使ってフロッタージュを体験した。

・色を重ね、かたちを重ねて

講師は「絵をつくる」ための次の段階として、色やかたちを重ねてフロッタージュすること、また紙の向きを変えたり、位置をずらしたりすることで同じものから思いがけない形やパターンが生まれることを実演で示した。



その後、児童たちは館内のさまざまな場所に行き、凹凸のあるものを見つけてはフロッタージュを重ねていった。配色を考えながら制作する児童、なるべくたくさんのかたちを見つけようとする児童など、各自の興味と工夫に従い、楽しみながら絵をつくっていった。

【鑑賞活動】

・講師の作品を鑑賞

講師の立嶋氏は「大阪版画百景」展の出品作家でもある。児童たちは創作活動の前か後に講師と対話しながらその作品を鑑賞した。抽象的な自身の作品についての「何に見える？」という問いから始まり、それに対する児童の発言に沿うかたちで、講師は制作意図などをやさしく説明した。

・ワークシートによる鑑賞

展覧会全体を対象とした鑑賞プログラムでは、参加校の教員が当準備室学芸員と相談しながら作成したワークシートを用いた。ワークシートの形式やプログラムの細部は学校により異なるが、鑑賞を前半と後半に分け、異なる働きかけを行って鑑賞を進める点は、どの学校も同じであった。

・お気に入りを見つけ、じっくり見よう

鑑賞の前半では展覧会全体を見ながら、気になった作品、気に入った作品をいくつか見つけてメモする活動を行った。その後中締めとして、自分の選んだ作品やその簡単な特徴を数名の児童が発表し、自分とは違った作品の見方があることを意識する場を設けた。

後半の鑑賞活動では、前半で選んだ作品の中から、さらに１－２点の作品を選んでじっくりと鑑賞した。児童は作品の中の気に入った部分や作品を見て考えたお話など、自分なりの「発見」をワークシートに絵と字で書き込んでいった。最後には数名が発表し、作品についての発見を共有する場とした。

ワークショップを終えて

「大阪版画百景」展の展示作品には現存作家のものが多いため、本ワークショップでも出品作家を講師として、創作と鑑賞を結びつけられる内容とした。展示作品の作者自身が対話型鑑賞や創作の講師となり、児童と向き合うことで、創作と鑑賞という一見対照的な活動に連続性をもたらし、児童は鑑賞・創作両面において集中力を途切れさせることなく、こどもらしい想像力、独創性を発揮していた。

今回は偶然に応募が４年生に集中したが、他の学年でも効果が期待され、今後も実施してみたいと思わせるワークショップであった。（学芸員　三井知行）

ワークショップ　１枚の段ボールからはじまる“居場所”づくり

高校生が数名のチームとなり、１枚の段ボール板から作ることができる実用可能なイスのデザインを考え、実際に制作することを通じて、デザイン、とりわけ建築の基本的な考え方を学ぶワークショップ。一般公募の高校生に加え、同時期に開催された大阪府高等学校芸術文化祭 美術･工芸部門コンクール展に応募した美術部や美術系学科の生徒が参加。制作したイスは、ワークショップ後に同会場で行われたコンクール展入賞者の表彰式で展示された。

日　時：平成29年１月29日（日）10:00－14:00
講　師：高岡伸一（高岡伸一建築設計事務所）
　　中塚啓貴（スエロ建築研究所）
　　栢木（かやのき）伸悟（同上）
対象・参加者：高校生　49名
会　場：大阪市立美術館　地下展示室
協　力：大阪府高等学校芸術文化連盟
助　成：一般財団法人 地域創造

★ワークショップがめざすもの

イスの「身体を下から支える」機能をどう形にするか、という課題を通じ、デザイン・建築の基本的な考え方や解決法について体験的に学ぶことを目的とした。同時に、チームで解決策を案出し協働で制作する、その方法自体を考えることにより、デザインに必要なコミュニケーションのあり方について意識できる内容もめざした。

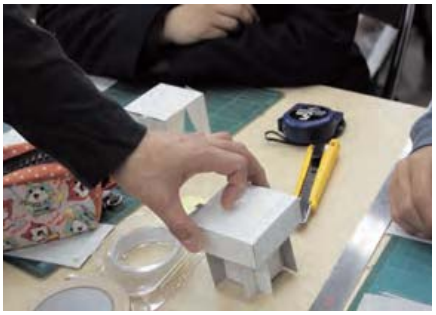
★ワークショップの内容

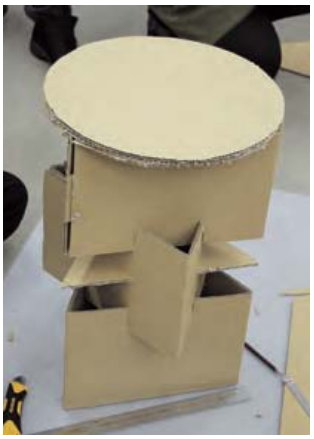
・導入ー講師による簡単なレクチャー
最初に高岡氏からデザイン・建築とは何かについて簡単にレクチャーした後、中塚氏・栢木氏が、自分達で設計した住居の建築模型を使いながら、実際の設計に際して考えたことやクライアントとのコミュニケーションなどについて説明。その後高岡氏より、今回の課題となるイスの制作について、段ボール１枚から作った座れるイスを実際に展開しながら、そのプロセスなどを示した。

・構想と模型作り
実物での制作に先立って、丈夫な構造とイスとしてのかたちについて、模型を作りながら検討。模型は５分の１のサイズで作るため、先ずは１人１枚配布された工作用紙を、段ボール板のサイズ180×90cmの５分の１の大きさに切るところからスタート。その後は所属校がバラバラの３人が１チームとなり、コミュニケーションをとりながら進行。チームごとにアイディアを練って模型を作り、講師のアドバイスを受ける。その際の細かい方法も各チームに任されているため、最初からディス

カッションを重ねるチーム、各自で模型作りまで行い、その後比較検討するチームなど、メンバーの個性によりさまざまな方法が見られた。
構想がまとまってきたら、講師とも相談しながら実際の制作で採用する案（その模型）を決定した。

・実際にイスを制作
昼食後に机を片付け、床養生の板の上で段ボールを切り貼りしてイスを作った。模型段階で充分に考えられていたためか、制作は思いのほか早く進む。
複雑な構造を採用したチームは完成までに時間がかかったが、全チームが時間内にイスを完成させることができた。そのかたち、構造とも似たものが少なく、非常にバラエティに富んだものであった。





ワークショップを終えて

図面や模型を作るだけでなく、実物を制作できるイスは、建築の初歩的なワークショップとして優れた題材であることを実感した。また、初対面のメンバーによるチームも高校生にとっては新鮮だったようであり、難易度からみても高校生に適していたように思われる。チーム内のコミュニケーションを模索しながら、イスに要求される構造とかたちを考える、という課題に最初は戸惑っていた高校生たちが、次第にチームワークをよくし解決策を見出していく様子は、本プログラムの効果を物語っていた。
事後の振り返りにおいて講師からも、手ごたえを感じられるワークショップなので、今後何度か実施してブラッシュアップしていきたいとの意見が出されたが、担当者としてもそれだけの可能性のある題材・ワークショップであると感じた。（学芸員　三井知行）

トークイベント 〈記録写真〉をよむ－『具体美術協会』関係資料より

本トークイベントは、美術作品についての専門的講座ではなく、記録写真という親しみやすい切り口から、アートへの興味と理解をより深めることを目的として実施。近年、資料展示によって作家やグループの創作活動を浮かび上がらせようとする展覧会がいくつも開催されるなど、一般の方でも美術資料に触れる機会が増えている。特に戦後美術については、作品が記録資料や写真によってのみ知られる場合も多く、記録写真の活用の機会が高まっている。このような状況も踏まえ、大阪新美術館建設準備室が所蔵する「具体美術協会」の記録写真を糸口に、写真から見えるものだけでなく、撮影された背景を含めて、さまざまに写真を読み解くレクチャーとした。

日　時：平成28年10月７日（金）18:30－20:30
講師（登壇順）：高柳有紀子（大阪新美術館建設準備室主任学芸員）
横山幾子（もと芦屋市立美術博物館嘱託）
妹尾綾（尼崎市総合文化センター学芸員）
加藤瑞穂（大阪大学総合学術博物館招へい准教授）
参加者：35名
会　場：大阪市立総合生涯学習センター 第２研修室
助　成：一般財団法人 地域創造

★トークイベントの内容

当準備室学芸員より所蔵資料の概要と、「具体」の活動において写真が重視・活用された事実について説明した後、「具体」の初期の活動を伝える有名な３つの写真をテーマに、写っている作品そのものの解説をはじめ、それぞれどのような状況で撮影されたのか、そして作品発表後、写真自体が独り歩きし、神話化している現在の状況をどのように考えるか等について、識者がレクチャーした。

1

はじめに：吉原治良と写真―大阪新美術館建設準備室所蔵《具体美術協会関係資料》について／高柳
テーマ１：村上三郎《通過》1956年　第２回具体美術展／横山（聞き手高柳）
テーマ２：白髪一雄《泥にいどむ》1955年
第１回具体美術展／妹尾
テーマ３：田中敦子《電気服》とドローイング
1956年　第２回具体美術展／加藤

2

3

©Makiko Murakami, Courtesy of the Estate of Saburo Murakami, ARTCOURT Gallery
©Kanayama Akira and Tanaka Atsuko Association

具体美術協会関係資料

前衛画家・吉原治良をリーダーとして昭和29年（1954）に誕生した「具体美術協会」（具体）は、戦後日本屈指の前衛芸術グループで、斬新な作品制作やパフォーマンスによって国際的に活躍した。近年、海外の研究者から改めて注目されている。大阪新美術館建設準備室は、平成26(2014)年から平成27(2015)年にかけて、「具体」の写真・映像フィルム、機関誌『具体』、具体展ポスターおよびパンフレット等の公式資料など、数万点におよぶ貴重な資料群の寄贈を受け、整理と公開を順次進めている。

新美術館×図書館 わくわくコラボ

図書館連携は、図書館の持つ地域とのつながりや資料の集積と、美術館の持つ専門性が融合することで、アートが新たな魅力を発揮できる場を地域に創りだす試み。５年目となる本年度は、中央図書館（西区）と此花図書館で、それぞれの地域史について外部講師が講演し、関連する美術についてのレクチャーを学芸員が行った。

★レクチャー“春日出のおばけ煙突”と“だまし絵”

日　時：平成28年12月４日（日）14:00－16:00
講　師：佐々木啓氏（此花区郷土史研究会会長）
　　三井知行（大阪新美術館建設準備室学芸員）
参加者：35名
会　場：此花区民ホール　第４・第５会議室
共同主催：大阪市立此花図書館

工場が多く立地し、「東洋のマンチェスター」と呼ばれた近代大阪の発展を支えてきた此花区。中でも安治川沿いに1960年代まであった春日出発電所の８本の煙突は、その巨大さと、見る位置によって本数がちがって見えることから「おばけ煙突」と呼ばれた。
今回初めてとなる此花図書館との連携では、現在あまり語られることのない大阪のおばけ煙突をテーマとし、その本数がちがって見えること（目の錯覚）にちなみ、だまし絵についても取り上げることとした。最初に古今東西のだまし絵的な作品などについて、学芸員が自館のコレクションも交えながら紹介。その後、佐々木氏が春日出発電所の歴史、黒岩重吾や松下幸之助など「おばけ煙突」に言及している人物や作品の紹介、また発電所周辺の地理などについて、豊富な写真資料を交えながら講演した。

★技術と美術　マルキ號製パンと大阪の美術

日　時：平成28年12月17日（土）14:00－16:00
講　師：水知悠之介（『マルキパンの光と影』著者）
　　小川知子（大阪新美術館建設準備室研究副主幹）
参加者：37名
会　場：大阪市立中央図書館　中会議室
共同主催：大阪市立中央図書館

中央図書館では、これまでは地域（区）にこだわらず、美術と本・資料の関わりなどをテーマとしたイベントを開催してきたが、今回初めてその立地する西区の地域資源・地域史を取り上げることにした。
西区は堀江などを中心に人気のパン屋の多い地域である。また、安定して量産可能なパン製造法を導入するなどして近代大阪・日本の製パン業界に功績のあった「マルキ號製パン」の本店と工場が、かつて堀江にあった。そこで、マルキ號製パンとその創業者、水谷政次郎をテーマとすることにした。最初にパリ留学時のアトリエを水谷政次郎が訪問した記録の残る近代大阪の画家・松本鋭次について学芸員が紹介。その後水知氏が、水谷政次郎の活動と業績について、マルキ號製パンに関することがらを中心に、明治から昭和期前半の日本のパン事情などを交えながら詳しく講演した。

新美術館×図書館　わくわくコラボを終えて

今年度の連携は、いずれも図書館からの発案で地域史を取り上げ、その研究を地道に行ってきた講師を迎えて行うことになった。従来のように学芸員が先導するのではなく、司書が主体的にアイディアを出し、各図書館がもつ地域とのつながりが活かされた連携であった。パン屋と発電所という対照的な内容だが、かつては有名で、当時のことがまだ記憶されているにも関わらず、現在では語られることが少ない、という点で共通しており、今日取り上げる意味のあるテーマであったと思う。また地域史は、大阪の美術を研究する上でも重要なものであり、今後より密接な関連を持つ内容に発展させていきたい分野であると感じた。（学芸員　三井知行）

クロストーク　大阪の版画を語る ――『版画８』から現代まで

「大阪版画百景」展の関連イベントとして開催したトークイベントで、戦後の大阪の版画をめぐり、当時を知る人々の記憶を共有しようと試みた。異なる視点をもつ作家、画廊経営者、研究者の話を中心に、また参加者の声も募ることで、様々な立場からの双方向的な語りの場とし、美術作品や展覧会へのより深く多面的な理解を促した。

日　時：平成29年１月22日（日）14:00－16:00
語り手：宮崎平凡（もと「画廊みやざき」）
持田総章（美術家、大阪芸術大学名誉教授、「大阪版画百景」展出品作家）
中塚宏行（大阪府府民文化部都市魅力創造局文化・スポーツ課研究員）
［ファシリテーター］菅谷富夫（大阪新美術館建設準備室長・研究主幹）
参加者：55名
会　場：大阪府立江之子島文化芸術創造センター　ルーム８
協　力：大阪府立江之子島文化芸術創造センター
助　成：一般財団法人 地域創造
「大阪版画百景 ―大阪新美術館×大阪府20世紀美術コレクション―」展関連イベントとして実施。
［会期 平成29年１月18日－２月11日／会場 大阪府立江之子島文化芸術創造センター／主催 大阪府立江之子島文化芸術創造センター、大阪新美術館建設準備室］

★クロストークの内容

昭和48（1973）年から平成３（1991）年まで大阪・梅田でほぼ毎年開催されたグループ展「版画８」を中心に、戦後の大阪の版画をめぐる状況を、当事者をゲストに招いて語ってもらった。
まず、「版画８」展の会場であった「画廊みやざき」のもと経営者の宮崎氏〔写真中央〕が、画廊を開き、版画を主に扱うようになった経緯や、開催された展覧会の数々、関わりのあった作家たちなどについて話した。

続いて、「大阪版画百景」展出品作家で昭和58（1983）年より「版画８」展に参加した持田氏〔写真下〕が、当時の展覧会案内葉書など貴重な資料のスライドショーとともに、自身の版画制作の軌跡や、自らも深く関わった大阪の版画教育について語った。
その後、大阪府で版画作品収集に長年携わった中塚研究員の話を交え、また展覧会出品作家など聴講席からも発言を募りながら、トークは展開。当時についての貴重な生の声が多々寄せられ、実り多いイベントとなった。

クロストークを終えて

地域の美術・文化資源の掘り起こしを活動の核とする公立美術館においては、作品収集や研究にも「連携」の視点が不可欠であることを、今回改めて実感した。本事業が対象とする20世紀後半の大阪の美術界は、当事者から生の声を聞く機会が既に希少化している。今後も積極的かつ組織的に「時代の声」を拾い上げる試みを続けねばと思う。戦後の関西の版画については京都を中心とした歴史編纂の試みがなされているが、本事業において大阪からの視点を提起出来たことも、大きな意義の一つであろう。（学芸員　清原佐知子）

IDAP国際シンポジウム　くらしを伝えるかたち

大阪新美術館は、国内有数の規模のデザインコレクションを有し、アート（美術）とともにデザインを活動分野の主軸におく。資料の収集・保存や展示に携わる一方で、平成26年からは工業デザインの製品情報等を集積する産学官三者連携事業「インダストリアルデザイン・アーカイブズ研究プロジェクト」（IDAP）に取り組んでいる。これらの成果を踏まえて今年度は、デザイン分野の先行事例紹介を交えた国際シンポジウムを開催した。

日　時：平成29年３月24日（金）18:00－20:00
ゲストスピーカー：
シビル・ホイマン〔写真上〕
（バウハウス・アーカイブ／ミュージアム〈ベルリン〉キュレーター）
アレックス・ニューソン〔写真下〕
（デザイン・ミュージアム〈ロンドン〉シニア・キュレーター）
会　場：大阪工業大学 梅田キャンパス OIT梅田タワー
共同主催：大阪工業大学、インダストリアルデザイン・アーカイブズ協議会
助　成：一般財団法人 地域創造

★シンポジウムの内容

デザイン作品・資料の保存や記録についてその意義を問い、デザイン・ミュージアムやアーカイブの役割について議論する、国際シンポジウム。ベルリンとロンドンの先行事例をベースに、デザインが私たちのライフスタイルにどのような影響を与えてきたのか、歴史的なデザインや現在のデザイン活動をいかに未来に活かしつなげていくべきかを探る試みとなった。大阪新美術館と共同主催者の大阪工業大学は、平成27年９月にデザイン分野の研究、教育に関する包括的連携協定を結んでいる。

インダストリアルデザイン・アーカイブズ研究プロジェクト（IDAP）

「インダストリアルデザイン・アーカイブズ研究プロジェクト」（IDAP）は、家電製品を中心とした工業デザイン製品について、「記録」（製品情報）と「記憶」（オーラルヒストリー）を集積し、研究等への活用を促進することを目的に、平成26年秋に産学官三者連携事業として発足した。平成28年６月に、プロジェクトのさらなる推進のために「インダストリアルデザイン・アーカイブズ協議会」を設立。同時に、家電製品等の写真付きデータベースや、往年のデザイナーへのインタビュー記事などを含むIDAPポータルサイト〔写真〕を公開している。

IDAPポータルサイト：
http：//www.city.osaka.lg.jp/contents/wdu120/artrip/idap/

外部研修生（インターン）の受入れ

大阪新美術館建設準備室では平成26年度より外部研修生（インターン）の受入れ制度を設けている。この制度は、文化行政、美術館運営、アートマネージメント、美術教育の分野での就労をめざす学生に、職業体験の機会を提供するもので、大学などの研究機関に所属する研修生は、教育普及や調査研究など大阪新美術館建設準備室の様々な活動に、当準備室学芸員とともに携わっている。今年度は、作品・資料の調査研究事業２件について、３名の外部研修生を受け入れた。

★吉原治良 作品調査　平成28年６－７月（５日間）

当準備室は吉原治良（1905―1972）の作品を約800点所蔵し、これは国内最大級の吉原コレクションである。これまで、平成10（1998）年や平成17（2005）年の大規模な吉原治良展等で公開してきたが、近年、開館に向けて計画的な修復を再開し、昨年度より外部研修生とともに修復予定作品の調査を行っている。吉原治良は生涯にわたり作風を変化させ、また実験的な技法もたびたび試みているため、制作時期により絵具の定着が悪く、剥落・剥離が生じ危険な状態であったり、美術館収蔵以前の保管状況により変色や変形、カビの発生跡が見られたりする。

研修では、戦後の作品を中心に開梱・点検し、作品状態を研修生が調書に記入した。作品の危険箇所はもとより、どのような修復が望ましいか、また緊急性はどの程度かを作品ごとに検討し、学芸員が見解を述べながら、研修生が所見を書き込むようにした。保管状況に問題がある場合は梱包方法を検討し、場合によっては梱包材を変更しながら再梱包した。作品の調査は学芸員としてもっとも基本的な仕事であり、今回触れたのは50点余りであるが、この地味な作業こそが美術館の表舞台を支えていることを、研修生には理解してもらえたのではないかと思う。また学芸員にとっても、言葉に出して伝えることで、修復や作家についての考えを整理し、緊張感を持って調査にあたるよい機会となった。（主任学芸員　高柳有紀子）

★生田花朝 資料調査　平成28年８月（５日間）

近代大阪ゆかりの日本画家・生田花朝（1889－1978）の創作や画業にかかわる美術資料（下絵、短冊、書簡等）を作家のご遺族から寄贈いただき、今後の作家および作品研究に役立つ貴重な資料であることから、外部研修生とともに初期調査を行った。研修生は記述と撮影を交互に担当し、まずは主な下絵のリスト化に着手。記述係はモチーフ、技法・材質などのデータをリスト化し、撮影係は撮影と計測の補助を行い、３日間で約100点の下絵（破片含む）を整理できた。書簡についても同様に、約60通の差出人や内容に関する手書きリストを作成した。時間が足りず、完成作との関連づけや作家の交友関係の分析に至らなかったことは残念だが、今後の生田花朝研究にとって重要な一歩となった。研修生は二人とも大学で培った日本画研究の知識を活かして丁寧に作業を行い、一次資料を直に取り扱う経験を深めてくれたと思う。

（研究副主幹　小川知子）

外部研修生（インターン）の声

中島小巻（吉原治良　作品調査）

大阪新美術館建設準備室には、「具体美術協会」結成以前から日本前衛美術の草分け的存在であった吉原治良の作品が約800点以上収蔵されています。本研修では、担当学芸員の指導のもと、吉原の油彩作品の状態調査を行い、美術的観点から今後の修復作業について検討しました。修復作業には、作品の状態改善や劣化を遅らせるという利点と同時に、画家の制作意図が損なわれる危険性もあります。そのため、このような事前調査は非常に重要です。
本研修によって、吉原の膨大な画業を目の当たりにし、多くの研究課題を見出すと同時に、市民に作品や資料を公開していくことの難しさを学びました。吉原作品は、その多くがパブリックコレクションとして各地の公立美術館に所蔵され、オークションなどの美術市場にはなかなか出回らないという実態があります。吉原作品の事例を受けて、作品や資料を公開、展示するという美術館の責務を改めて痛感しました。本研修で目にした吉原作品は、ほんの一握りに過ぎませんが、実験の爪痕が残る習作を調査できたことは、吉原の人物像や問題意識を肌で感じ取る貴重な経験となりました。

楠井ひかる（生田花朝　資料調査）

今回、近代に大阪で活動した女性画家・生田花朝の下絵と書簡の初期調査に研修生として参加し、資料の状態や描かれている内容の記録、保存環境の整備等の作業から、美術館への来館者とは違った立場から作品に触れる有意義な機会を与えていただきました。
美術館に訪れる動機は人それぞれですが、自分が知っている画家や作品が展示されていることに関心を持つことが多いかと思います。その点、調査対象の生田花朝は、現代においては知名度が高い画家とは言えず、その名前だけで来館者の目に留まる存在では未だないのかもしれません。しかし、たくさんの資料を目にするうちに彼女の優しい絵画空間に親しみを感じ、多くの人に知ってもらいたいと思うようになりました。それを叶えるためには研究の進展に加えて、美術館は知らなかった画家や作品に親しみや興味を持つきっかけの場だと、多くの人に認知されることの必要性を、研修を経て強く感じました。

豊田郁（生田花朝　資料調査）

インターンを通じて、一次資料の取扱いや初期調査・整理の方法を学び、学芸員業務の一部を経験させていただき、充実した研修となりました。はじめに、初期調査･整理の研修では、資料の制作技法や表現の特徴を捉え分類・記録していく方法を学び、資料の意味・価値を読み取り、保存・活用を検討するうえで重要な学芸員業務の一つだと思いました。そして、華やかな展覧会に至るまでに、膨大な資料を調査・整理していく地道な業務があることを改めて実感しました。さらに、下絵や書簡といった、画家個人の試行錯誤や私生活が窺える資料を調査・整理して、学芸員の業務が、一人の画家の人生そのものを理解・保存し、後世に伝えていくという役割を担う重要な仕事だと感じ、意欲が高まりました。今回のインターンで学ばせていただいたことを今後の活動に活かしていきたいと思います。

連携事業　5年の歩み

大阪新美術館建設準備室の連携事業は、平成24(2012)年の「ザ・大阪ベストアート展 ―府＆市モダンアートコレクションから―」(会期 9月15日－11月25日／会場 大阪市立近代美術館(仮称)心斎橋展示室)の関連イベントとして試行的に始まり、翌年に展覧会から独立した新事業となった。以来、美術館の外とつながり、外の資源をアートと結びつけ、美術館の資源を外の人々にも活用してもらうという、この連携の試みは、今年度までの５年間で大きく発展した。

当準備室では、こどもや学校向けに長年ワークショップ等を行ってきたが、５年前より連携事業として注力することで質量ともに充実し、参加者の層は小・中学生から高校生へと広がった。図書館や区役所との連携事業は、この５年間に市内14区で実施し、各地域に根差した文化資源とアートとの接点が着実に増えた。一般市民が美術作品を選んで展覧会を作る「市民キュレーターワークショップ」は、５回の開催で26名が参加し、各人の立場や視点が活きたユニークな展示が生まれた。平成26(2014)年に開始した、大学との連携による外部研修生(インターン)の受入れや、同年に発足した産学官三者連携事業「インダストリアルデザイン・アーカイブズ研究プロジェクト」(IDAP)によって、連携の間口は大きく広がった。

連携事業に５年間携わってとくに実感するのは、美術を語る言葉や、美術へのアプローチの方法は、美術と向き合う人の数だけあるということである。さまざまな人が美術と関わり、また美術を機に人と人とが出会うことで、美術や美術作品の魅力はこれからも新たに大きく広がると期待される。この５年に得たものを糧に、今後は美術館開館を見据えて具体的な事業プランの策定に取り組むこととなる。引き続き私どもの活動や美術館の開館に、ご注目、ご支援いただければ幸いである。(学芸員　清原佐知子)

(仮称)大阪新美術館　公募型設計競技(コンペ)最優秀案／株式会社 遠藤克彦建築研究所

Artrip Museum
大阪新美術館コレクション

http://www.city.osaka.lg.jp/contents/wdu120/artrip/
大阪新美術館コレクションの魅力を伝える特設サイト〈アートリップ・ミュージアム〉。
平成25－27年度の連携事業報告書もご覧になれます。

平成28年度　大阪新美術館建設準備室　連携事業報告書

編集・発行：大阪新美術館建設準備室
〒553-0005 大阪市福島区野田1-1-86 8階
大阪市経済戦略局文化部内
TEL：06-6469-5189　FAX：06-6469-3897
助　　成：一般財団法人 地域創造
発 行 日：平成29年３月24日
印　　刷：有限会社 ウェイク